

[学会] 第788回 千葉医学会例会

第12回 千葉大学小児外科教室例会

日時：昭和63年12月10日（土）正午

場所：千葉大学附属病院外来棟3階第3講堂

2. 右主気管支が食道より分岐した Bronchopulmonary Foregut Malformation の1例

大塚恭寛 (千大)

症例は生後16日男児。主訴は多呼吸。右前胸部に呼吸音を聴取せず、胸部X線上、右無気肺を認めた。気管支造影、食道造影、食道内視鏡の所見から、右主気管支が食道より分岐していることが疑われ、生後23日、右肺切除術施行。右肺は分葉なく、組織学的に正常肺組織でありBronchopulmonary Foregut Malformation と診断された。合併奇形はなかった。術後6カ月現在、軽度の呼吸器症状を認めるが、健在である。

3. 新生児孤立性肝嚢胞の1例

幸地克憲 (千大)

われわれは新生児孤立性肝嚢胞の1例を経験したので報告する。症例は生後30日の女児で腹部腫瘤を主訴に来院。腫瘤は、腹部全体の3/4を占める cyst で、腸管膜嚢腫または卵巣嚢腫の診断で手術を施行。肝両葉から発生した大きさ12×10×17cm の孤立性単房性肝嚢胞であり、嚢胞壁の肝側を残し亜全摘した。術後経過は良好で再発は認められない。

4. 胸壁修復に苦慮した間葉性軟骨肉腫の1例

後藤憲一郎 (千大)

乳児の左胸部より発生した間葉性軟骨肉腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。

症例は生後3カ月の男児。左胸部腫瘤を主訴に近医受診。胸部骨腫瘍を疑われ、当科入院となった。入院時、胸部単純X線にて第7、8肋骨の破壊が顕著であり、腫瘤内に著明な石灰化が認められた。生検で、上記診断を得、腫瘤摘出術を施行。術後、呼吸管理を要したが、再発もなく経過良好にて、退院となった。

5. 小児外科疾患の栄養評価

我妻道生 (千大)

慢性栄養障害の指標として身長年齢比、急性栄養障害の指標として体重身長比を用いて小児外科疾患について術後の成長障害の有無について概説した。大旨成長は良好であったが、食道閉鎖症、横隔膜ヘルニアで何らかの成長障害をきたした症例が他疾患に比しやや多かった。今後さらに生化学的検査、代謝動態からみた栄養評価を加え、総合的な栄養評価を行ないたい。

6. 神経芽腫遺伝子に関する基礎的検討

松永正訓 (千大)

神経芽腫の予後因子として、従来よりさまざまなものが研究されてきたが、近年分子生物学の発展により、N-myc 癌遺伝子の増幅度が腫瘍の悪性度と密接に関与していることが分ってきた。そこで、臨床上極めて悪性の経過をとった患児の神経芽腫培養細胞の N-myc を、サザン・ブロット法にて測定したところ、20倍以上に増幅しており、この結果は、臨床的悪性度とよく一致していたと云える。今後、神経芽腫の治療を目指し、研究を進展させたい。

8. 鎖肛症例における外肛門括約筋の分布に対する筋電図検査の応用

新保和広 (千大)

鎖肛症例術前71例に外肛門括約筋筋電図検査を施行、外肛門括約筋分布地図を作成し次の知見を得た。①外肛門括約筋の分布面積は、加齢とともに増加する傾向がみられた。一方、鎖肛病型間には統計上有意差が認められなかった。②外肛門括約筋の分布中心と肛門窩の位置には、ほぼ全例にずれが認められた。